

小特集 京都女子大学文学部国文学科編『吉澤文庫善本解題目録』刊行記念

吉澤文庫閉架書庫配架資料六点影印

令和七年三月十日、京都女子大学図書館より『吉澤文庫善本解題目録』が刊行された（後日、全文をインターネットで閲覧できるよう図書課で手配頂ける予定）。図書課の多大なる協力を得て、京都女子大学文学部国文学科が編集したもので、同学科に所属する全教員が分担執筆した。また、一部の本学大学院国文学専攻学生や本学国文学科卒業生、さらには他学部他学科教員なども、分担執筆に加わっている。昭和三十九年に公刊されていた一般書も対象とする悉皆目録（『京都女子大学図書館報』特別号）に対して、善本に限った解題目録の作成が、昭和五十年代に計画されたものの、頓挫したままになっていた。それを受け継いだものである。B5判で、末尾の「書名索引」なども含めて計約百八十頁、全百十二項目。善本と認めて選出した資料一点ごとに一項目を立てて（複数の資料を一括して一項目とした場合もあり）、書誌事項をはじめとする解題を、必要に応じて影印を交えつつ掲載した。また、当該資料自体に言及する参考文献があれば、それを項目の末尾に掲げもした。なお、吉澤文庫は、昭和三十二年、本学図書館に最初に設置された個人文庫。京都帝国大学教授で、本学にて教授も務められた、国語学・国文学者で、歌人、書家でもあった吉澤義則先生（一八七六～一九五四）の旧蔵書約六千点から成る。今回の刊行を記念して、目録に取り上げた閉架書庫配架資料（貴重書指定のもの）と違ってマイクロフィルムや紙焼写真がない）のうち六点の影印を掲載することとした。

筑紫紀行 東路のつと

請求記号 Y291.081

資料 ID 512001748

袋綴写本合一冊。外題「筑紫紀行」、内題ナシ。縦二六・四×横一八・五糎。奥書「右両紀行求或人之家本書写之訖。于時享保壬子之冬日 隱□（「乞」カ）翁書之」（最終丁裏 目録に影印掲載）あつて、享保十七年（一七三二）の書写と知れる。宗祇による紀行『筑紫紀行』（『筑紫道記』）と、宗祇の弟子である宗長による紀行『東路のつと』とを、合写している。前者は二十三丁、後者は十四丁に亘る。『筑紫紀行』は、新日本古典文学大系も中世日記紀行文学全評釈集成も、猪苗代兼載所持本によつて永祿四年（一五六二）に里村昌叱が書写した系統のものとの奥書を有する群書類従本を底本として、天和三年板本と校合している。そうした状況にあつて、享保十七年書写の吉澤文庫本は、本作品の本文校訂上における意味はほとんど持っていない。『東路のつと』の方は、重松裕巳編『宗長作品集（日記・紀行）』（古典文庫四四三、昭和五十八年）が、計五本の写本の翻刻を収載するとともに、さらに右吉澤文庫本を含む六伝本を取り上げて、詳細な検討を加えている。そのなかで、右吉澤文庫本についても、翻刻を収載する享保十二年（一七二七）写の太宰府天満宮蔵西高辻家本、また天明七年（一七八七）写の天理図書館蔵綿屋文庫本と、「内容は」「同じ」と指摘する。ただ、本文の字句には細かな相違が種々見られ、三本を対照することによつて、それら三本が属する系統の本文をより正確に見定められることだろう。以下には、後半の『東路のつと』の分（24オ～37オ）のみ、影印を掲げておく。なお、連歌師の紀行としては本学図書館には、最善本である「甲子庵文庫本にもっとも近く」「甲子庵文庫本について注意すべき写本である」（島津忠夫・大村敦子編著『甲子庵文庫紹巴富士見道記影印・翻刻・研究』和泉書院、平成二十八年）『紹巴富士見道記』寛文頃写本も所蔵されている。（中前正志）

竹後よりいふ人ありていへば
しづりありて連歌あり

わがわがわがわがわがわがわが

ふふふふふふふふふふふふふふふふ

成程なり

ねえねえねえねえねえねえねえ

松の葉の音をきくと水は流る

山道の能く又ふふふふふふふふふふふふ

量りありて音のなることと音なり

物に由りて音のなることと音なり

ふふふふふふふふふふふふふふふふ

まゝなほいし申とせしむる様とせしめ候へば
し難うとて昔よりいふに申すに
小にせしめしむる可敷いなるに申すに
るの白く入おしほしめしむるに
まゝなほ様候ふとてとせしめ候へば

世々社とてはたかたはたの御事

常い常法に退の地より申す候へば
へしとて申す候へば申す候へば
一とて申す候へば申す候へば
ゆたかゆたか申す候へば
候へば申す候へば申す候へば

梶原大高直経の難はういふはむのいふはむのいふはむの
この字面もいふはむのいふはむのいふはむのいふはむの
いふはむのいふはむのいふはむのいふはむのいふはむの
いふはむのいふはむのいふはむのいふはむのいふはむの
いふはむのいふはむのいふはむのいふはむのいふはむの

いふはむのいふはむのいふはむのいふはむのいふはむの

いふはむのいふはむのいふはむのいふはむのいふはむの

いふはむのいふはむのいふはむのいふはむのいふはむの

いふはむのいふはむのいふはむのいふはむのいふはむの

いふはむのいふはむのいふはむのいふはむのいふはむの

いふはむのいふはむのいふはむのいふはむのいふはむの

いふはむのいふはむのいふはむのいふはむのいふはむの

遠くへ人無りのあたりの海をのぞくと一他またさう
かなる新送るや

よきとき世は海に枯れぬやうか

早津のり路に身をまかせ人無しの海をのぞくとさう
よきとき世は海に枯れぬやうか

高のらにほじりて海をのぞくとさう

長月空をのぞくと海をのぞくとさう
よきとき世は海に枯れぬやうか
高のらにほじりて海をのぞくとさう
よきとき世は海に枯れぬやうか
よきとき世は海に枯れぬやうか
よきとき世は海に枯れぬやうか

御書に云くは、
御書の御書に云くは、

御書の御書に云くは、
御書の御書に云くは、

御書の御書に云くは、
御書の御書に云くは、

御書の御書に云くは、
御書の御書に云くは、

御書の御書に云くは、
御書の御書に云くは、

御書の御書に云くは、
御書の御書に云くは、

御書の御書に云くは、
御書の御書に云くは、

御書の御書に云くは、
御書の御書に云くは、

御書の御書に云くは、
御書の御書に云くは、

御書の御書に云くは、
御書の御書に云くは、

御書の御書に云くは、
御書の御書に云くは、

その日とて遠く赴くことなしとて思ふるも
一ふりなりて直ぐと申す

中洲の舟の白き波の音

わが舟の船新送てくらの白き波の音なり
青浪もくもくもくはるかに響きわたる
九月十一日子孫傳
ついで舟の舟の音なりとて思ふるも
舟の音もくもくもくはるかに響きわたる

舟の音もくもくもくはるかに響きわたる

舟の音もくもくもくはるかに響きわたる

舟の音もくもくもくはるかに響きわたる

ありては其の自ら守る例を注し是れ後田中督中補
志幸編

通記を以て其の元々の

別後田中督中補

書

通記の分を以て其の

通記の分を以て其の

通記の分を以て其の

通記の分を以て其の

通記の分を以て其の

通記の分を以て其の

うの用乃をきぬゆる燦のまら

又人の事かきし

あめしつものうらなき思ひしあふ

海原思ひきしらう

あまといし生所さききしき乃まは

る陽豊前寄るま直舞のありししけ言ひししあふ

ゆ来しゆふるま直舞ゆりゆりゆりし又一た直舞の奈

白乳方いりりり

ゆし直をわねてま直を直

ま直をま直をま直をま直をま直をま直をま直を

ま直をま直を

秋の風は涼しくも哀しくも

唐の菊杜どのの世はゆきゆくゆく

深き 沙羅石より又取りし泉掃の跡の宿跡の遠き人形

あゝ懐我の心かな

久々のれや暁く下家の杜を風

秋のの木の中のかくもくく

かろゆりゆく平澤舟ゆく

ふゆをりねゆくゆく

中書なき石動地ゆくゆく

長寺天憚彈春六候嶽の溪舞心る意四所遷化の旧跡

りゆがむを踏ゆくゆく

一

神の如くしてとらふを記さしむるは 皇野人 漁舟の底中
まじりてゆくはらふやうに ともやうくまゆすおぼし
いらくさりつゝまらんをさく 江戸の館くまをさく
世教之百類あり

あまを記紅の田舎の細り那

まじりてゆくはらふやうに

あまを記紅の田舎の細り那

上校 健吉

一り記してありあつて 去るくまをさく
まじりてゆくはらふやうに 皇野人 漁舟の底中
あまを記紅の田舎の細り那
あまを記紅の田舎の細り那
あまを記紅の田舎の細り那

父島入まじかやと夫を怪味もく世に思はれあさく
余り可會ありしに故さつてまじかやのゆきを五れり

ふく根をききつてあさくのみまじか

方丈のあしはゆいあさくをわくえく後らつて也

とあるに絶ちつてのまじか中心方法記きる年ゆきと一書

しつてまじか一わくえくをわくえくつて改めり

たのゆき

たのゆきやゆきつての後らつて也

まじかゆきをわくえくつてまじかゆきつて今まじかゆき

のまじかゆきつてのまじかゆきつてまじかゆきつて

能くまじかゆきつてのまじかゆきつてまじかゆきつて

まじかゆきつて
まじかゆきつて
まじかゆきつて

一 樂庵記

請求記号 YW210.083/K

資料ID 512001145

黄土色無地表紙(縦二四・一×横一七・一糶)、墨付五丁の袋綴一冊。寛政八年(二七九六)あるいは同九年の書写。外題「一樂庵之記」(表紙左上題簽に墨書)、内題「一樂庵記」。外題の右下に墨書「北畠信意卿」。奥書(5ウ)は、もともとは北畠信意自筆本を慶長二年(一五九七)に書写したものとす。他に伝本が見当たらない孤本である。前表紙見返紙右下に、本文と同筆で「此記真偽未詳。然故実有所取焉。因附管見。天明甲辰季閏正月 古我波都玖比呂云」と記されており、天部に見える注釈は、この「古我波都玖比呂」によるものか。「あんらくじ」(安楽寺)の「りやうが」(良雅)に誘われ、この国に来て三年になると、冒頭に記す。頭注も指摘するが、「あんらくじ」とは、伊勢国鈴鹿郡安楽村(現三重県亀山市安坂山町)にある禅宗寺院。同寺の近くに、奥書に見える、北畠信意が退隱したという「御所比良」が存する。本書は、その辺りに退隱して一樂庵を結んだことなどを記述しているようである。そのことを、北畠具教の子の伊勢国司とも織田信雄が改名したものとされる、北畠信意が、自ら記述したものであると、本書は主張しているのである。しかし、先引通り古我波都玖比呂も「此記真偽未詳」と記すが、恐らくは偽書であるに違ひなからう。信意が「御所ヶ平」に隱居したという伝説は、『鈴鹿郡郷土誌』や『龜山地方郷土史』に記され、遡れば天保四年(一八三三)完成『勢陽五鈴遺響』鈴鹿郡卷之四に「此山脈ニ続キテ御所カ壙ト云アリ。多氣国司信意経廻ノ地ニシテ、山溪ノ間蹙ク幽棲ス。木造殿ト称シ、故ニ御所壙ト云。樵夫ノ伝ナリ」などと見ることが知られている。本書『一樂庵記』は、より遡る時点で生み出された、北畠信意退隱伝説に伴う偽書として興味深く、精査が望まれるところであらう。

(中前正志)

多氣國同四
幸今亦所書

Handwritten text in cursive style, likely a letter or document fragment.

古馬路之往
有之

Handwritten text in cursive style, including the characters '古馬路' and '有之'.

芳野殿後朝
皇子

Handwritten text in cursive style, including the characters '芳野' and '皇子'.

沈山鈴鹿郡也
八幡宮今橋片

Handwritten text in cursive style, including the characters '沈山' and '鈴鹿郡'.

坂本鈴鹿郡也
本良坊社今存

Handwritten text in cursive style, including the characters '坂本' and '鈴鹿郡'.

新

Handwritten text in cursive style, including the character '新'.

4才

3才

なすさしあしーすささしー

佐藤

こもさしあしーすささしー

こもさしあしーすささしー

こもさしあしーすささしー

こもさしあしーすささしー

こもさしあしーすささしー

こもさしあしーすささしー

こもさしあしーすささしー

こもさしあしーすささしー

こもさしあしーすささしー

こもさしあしーすささしー

こもさしあしーすささしー

こもさしあしーすささしー

こもさしあしーすささしー

こもさしあしーすささしー

こもさしあしーすささしー

こもさしあしーすささしー

こもさしあしーすささしー

こもさしあしーすささしー

こもさしあしーすささしー

こもさしあしーすささしー

こもさしあしーすささしー

こもさしあしーすささしー

こもさしあしーすささしー

こもさしあしーすささしー

こもさしあしーすささしー

こもさしあしーすささしー

こもさしあしーすささしー

5才

4才

信雄有續信
長之弟
御所比喜事
別記有三

一樂庵記者北島在中將源信意卿讓多氣
御所於信雄卿而退隱御所比良山邑與郡
行池
良程二里近江出谷所比而筆記之
慶長二年六月以左中將真筆寫

寬保三年正月



寛政九年秋月良月記
御所比喜事
別記有三
信雄有續信
長之弟
御所於信雄卿而退隱御所比良山邑與郡
行池
良程二里近江出谷所比而筆記之
慶長二年六月以左中將真筆寫

後表紙見返し

拙著目録

請求記号 YW028.8/T

資料ID 512000090

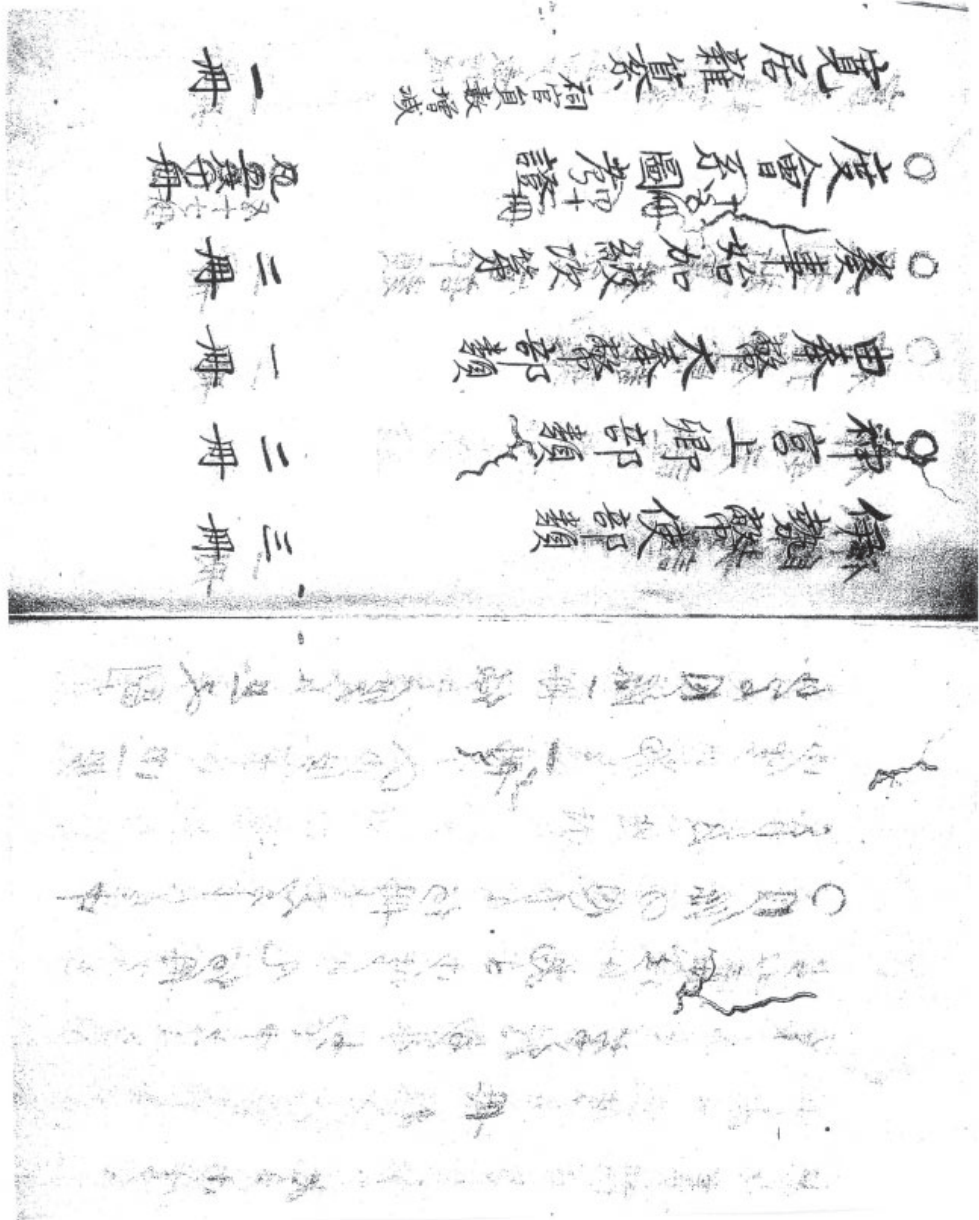
本文共紙の表紙(縦二七・四×横一八・三糎)の左上に、「足代弘訓／拙著目録」と墨書する、墨付一〇丁の写本一冊。蔵書家としても知られる新見正路(一七九一〜一八四八)が、天保十二年(一八四二)から水野忠邦が失脚するまで、将軍家慶の御側御用取次を務めていた時期に、新見からの依頼を承けて、差し出した目録を中心とする、足代弘訓(一七八四〜一八五六)の著述目録である。まず新見の依頼に対する返答があり(1オ〜2オ)、そのあとに五行分の凡例を挟んで、「伊勢幣使部類 三冊」から「贈答歌部類 四冊」に至るまでの目録が続く(3オ〜7ウ)。さらには、その差し出した目録に対する新見側からの返書も掲載している(8オ〜8ウ)。これらのあとにさらに、「此目録以後之著述」と題して、「二 御師考証附録 一冊」以下の目録を載せる(9オ〜10ウ)。同日録の途中(9ウ)、「日本紀通証部類／続日本紀部類」と書いた二行分を覆う形で短冊状の紙片の下端部が貼付されていて、その紙片の上から元の料紙にかけて、別筆にて「日本紀人名部類 九冊／稿本日本後紀人名部類 六冊」(冊数は次行の「七冊」と共に朱書)と書かれており、以降は最後まで、その別筆で記載されている。同別筆はまさに弘訓のもので、途中からは弘訓自らが書き継いでいる。また、新見に差し出した目録の方の諸所に見える、冊数を修正した朱書「五十七冊」(3オ)などや朱書「〇」印も、弘訓筆のようである。「真に先生の自筆追加もあり、また、全部にわたりて先生自らの校訂もあれば、世に伝ふる所の先生著述目録とは多少の異同あれとも、此本を以て正とすへきか」と記す紙片が添付されている。相当数伝存するらしい弘訓の著述目録のうち神宮文庫所蔵の嘉永元年写『足代弘訓著述目録』(第二一門 六)は、右吉澤文庫本と大変近いが、同本の弘訓自筆箇所は全く含んでいない。なお、弘訓は、国学者・歌人、伊勢外宮の神官。(中前正志)

此の草子... 抄本
 〇目錄の因り又何冊と云ふ中
 抄本... 凡何冊と云
 抄本... 何冊と云
 抄本... 何冊と云
 抄本... 何冊と云

2才

此の目錄一冊... 且文副
 抄本... 一冊... 四覽... 四覽
 抄本... 一冊... 四覽... 四覽
 抄本... 一冊... 四覽... 四覽
 抄本... 一冊... 四覽... 四覽
 抄本... 一冊... 四覽... 四覽

1才



3才

2才

- 寛居雑纂 田戸數増減 一冊
- 足利將軍御參宮部類 二冊
- 神境合戰類聚 二冊
- 禪領考證 一冊
- 御師考證 一冊
- 神領政事沿革 一冊
- 藤原秀卿朝臣佩劔考證 一冊
- 豊宮崎文庫雜載 一冊
- 守護使不入考 一冊
- 神延童諭 一冊

4才

3ウ

- 寛居雑纂 一冊
佛象禁戒之部
- 寛居雑纂 一冊
把物之後像 庚午籍 破承
- 寛居雑纂 一冊
飛神明停止之事
- 寛居雑纂 一冊
外宮觀懸木板事 自餘五條
- 寛居雑纂 一冊
神宮破損之事 心御柱之事 天年賀之事
- 寛居雑纂 一冊
遠詞之部
- 寛居雑纂 一冊
敬神之部
- ぬすみの経 二冊
- 代りの如し 二冊
- かき跡 二冊

5才

4才

叙位任官大略

一册

〇圖史部類

律令圖解

寬居雜纂

稱謂之部

一册

寬居雜纂

中華中國之部

一册

觸穢甲乙丙辨誤

一册

養子假服雜載

一册

禁忌類聚

七册

觸穢類聚

五册

服假類聚

六册

物語歌頭字部類	九冊	〇 萬葉集頭字部類	四冊
古今六帖頭字部類	十冊	〇 萬葉集類語	九冊
消息部類	八冊	〇 源氏物語類語	九冊
〇 源氏物語類語	九冊	〇 萬葉名所部類	九冊
〇 歌集類語	九冊	〇 萬葉集頭字部類	四冊
〇 萬葉名所部類	九冊	〇 萬葉集類語	九冊
〇 萬葉集頭字部類	四冊	〇 寬居雜纂	二冊
〇 萬葉集類語	九冊	〇 枕詞	三冊
〇 寬居雜纂	二冊		
〇 枕詞	三冊		

7才

6才

物語歌下句頭字部類

詞のやまに補翼

詞のたぎ波

旋頭歌類聚

字津保物語歌部類

贈答歌部類

九冊

廿九冊

一冊

一冊

四冊

先後由表述物、兼為何而平之

少細書、兼作、如仕、如、思

石、内、寄、物、主、草、地、公、冬、付、津、表

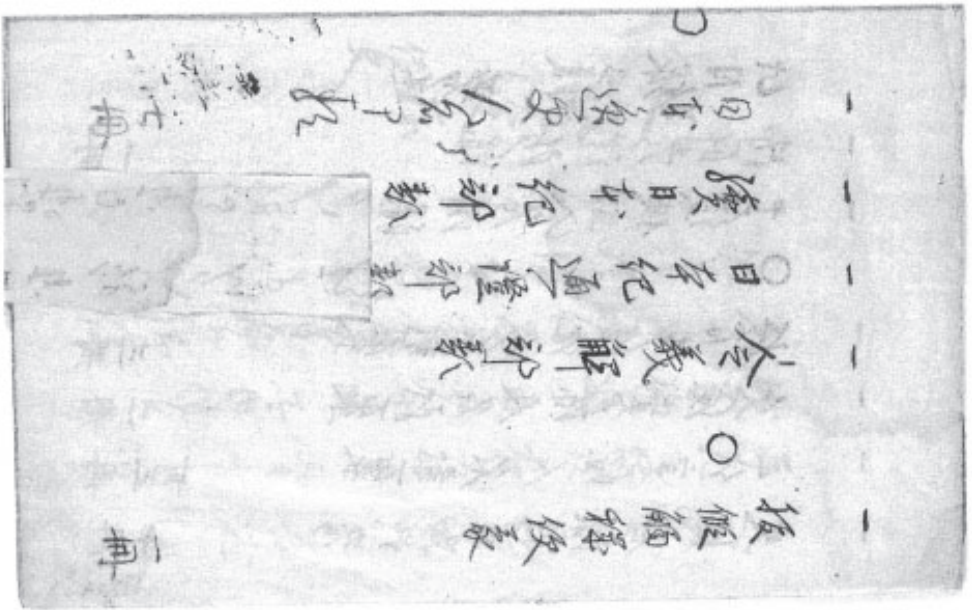
述、首、三、年、為、四、年、一、又、副、本

有、名、二、年、難、合、十、五、冊、四、卷、年

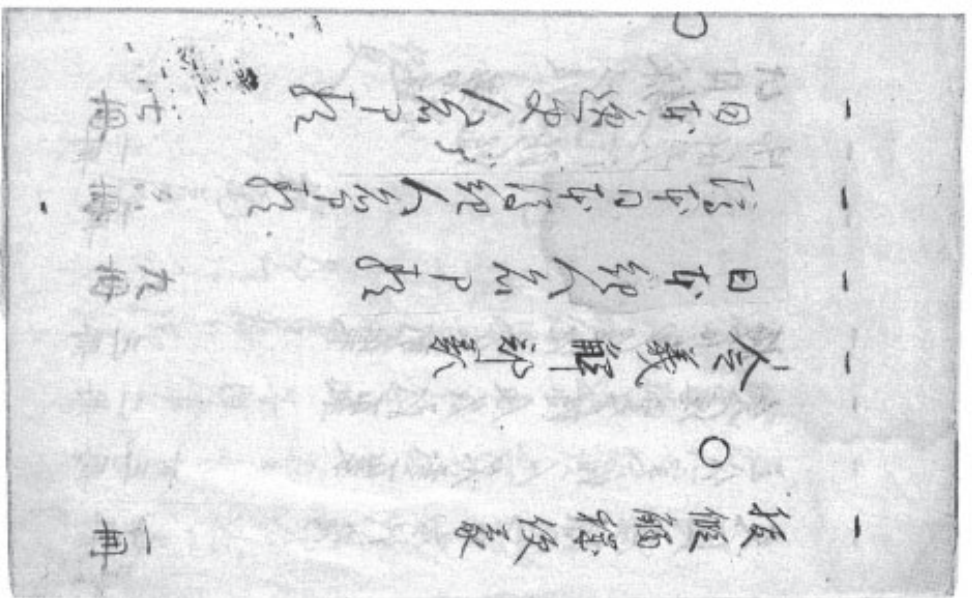
雖、有、名、位、在、何、地、也、了、了、年、中、也

何、也、也、精、密、也、也、也、也、也、也、也

有、抄、卷、年、也、也、也、也、也、也



9ウ (貼付された紙片をめくり下げた状態)



9ウ (貼付された紙片そのままの状態)

※1才と9才については、他とは異なる形で撮影した写真を使用。

一冊	水縁通文子略
一冊	寛永推算数
一冊	陣衣考略
一冊	天平倉考略
一冊	早稲巻巻目録
一冊	古子理能煙火同公
三冊	煙火編 振巻考略 同公 同公
一冊	新義集二卷 同友小傳
一冊	宛字総目録 同友小傳
一冊	建築蔵書考略
一冊	泉字理能通算考略

10才

10才

氷面鏡

請求記号 Y673.9586/M

資料 I D 512002081

並製本一冊。縦二一・五×横一五・〇。糊、菊判。外題「ひも鏡」、見返し題ナシ、扉「氷面鏡」（文字朱）、内題「氷面鏡」（三井呉服店案内）、柱題「ひも鏡」（版面上部右横書き）、背題は原状確認不能（補修テープの上から「氷面鏡」と後人の追記）。表紙・裏表紙共に色刷り、絵入。奥付に「明治三十三年十二月廿九日印刷／明治三十四年一月一日発行」
非売品」とあり、編輯兼
発行者合名会社三井呉服店営業部長 日比翁助 東京市日本橋区駿河町七番地」と記載。各項目の内容と丁数は『吉澤文庫善本解題目録』（以下『目録』と略記）参照。多彩な誌面による構成であり、本号所載の影印も参照された。
い。

三越のPR誌の一書で、明治二十六年（一八九三）に越後屋が合名会社に改組し、明治三十七年（一九〇四）に再び三越呉服店に名称変更するまでの期間の「三井呉服店」時代のもの。顧客配布の非売品のため、原本を架蔵する図書館は稀少（天理図書館、東京都立中央図書館、神奈川近代文学館神西清文庫他、国立国会図書館デジタルコレクションの閲覧は館内・送信サービス限定）。明治後期産業発達史資料第五四一卷（二〇〇〇・六 龍溪書舎）に複製もあるが、細部まで意匠を凝らした誌面による贅を極めた美本であり、特に帯地や着物・長襦袢等の色刷雛形の発色や金泥による彩金加工の立体的質感などは複製では再現不能で、状態良好な原本の所蔵に意義が認められるため、今回の選定に至った。

銀箔で草花を象る美麗な飾り枠に朱で印字された尾崎紅葉の題辞は、「衣は身の章なり」と謳い、「善く此の冊子を用る者は。応に鶯花世界に入りて。道の千草をも靡すべし」と人心を鼓舞する。新時代の大衆の生活・商業施設の営業活動に文学を接続させる意図も顕著で、随所に挿入される気の利いた画とキャプション（影印参照）などに尾崎紅葉の関与が濃厚に窺われる一書。紅葉の活動を見直すうえでも有益な資料として注目される。（峯村至津子）



『氷面鏡』 表紙と紅葉による題辞 1 頁目

に羞づべけむや。而も衣は身の章なり。之を取
るに必ず擇ばずはあるべからず。若し擇
びて宜からば。水聲山色門を出づれば。春時
に風有りては。翠の絲にほしいまゝなる紅
も打匂ふらむを。則ち謂へらく。善く此の冊
子を用る者は。應に鶯花世界に入りて。道の

千草をも靡すべしと云ふ。

于時明治三十三年小春吉日

十千萬堂紅葉

『水面鏡』 題辭 2～3 頁（銀の飾り枠、本文は文字朱）

氷面鏡 (一名三井呉服店案内)

目次

題氷面鏡辭

挿繪

- 三井呉服店本店表口の圖
- 三井呉服店本店裏口の圖
- 三井呉服店本店階上階下平面圖
- 大坂三井呉服店陳列場の圖
- 縹織丸帯地 扇面ちらし
- 裾襷様 高砂
- 裾襷様 春の野
- 裾襷様 隅田川
- 裾襷様 更紗梅
- 裾襷様 霞文御櫻

裾襷様 染分竹

縹の織丸帯様 丸帯織

長襦袢 翁格子は花の丸

長襦袢 磯尾

友誼結細摺襷織の夢想羽織

夢想羽織大津繪ありび

大幅緋紋子紋襦袢野探幽霊軍金銀色緋織取風襷様

小紋の色々

小紋の色々

三井呉服店事業の説明

三井呉服店本支店出張所工業所

呉服物販賣店

商賈の多少を問はずの事

現金正札附の事

陳列場の事

品物を持参して賣る事

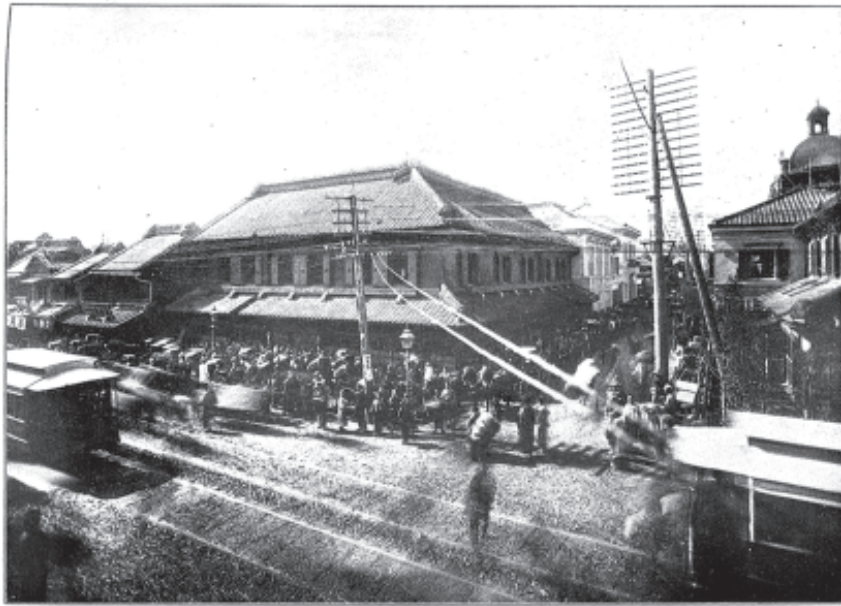
『氷面鏡』 目次 1・2頁 (ノンブルなし)

地方の注文に應ずる事
 寄切室の事
 呉服物切手の事
 新案の模様廻柄の事
 裁物の事
 爲替表込所の事
 呉服物仕入店
 染物工場
 権出織物店
 生絲製造所
 製造品の事
 製品販賣の事
 器機及製造高の事
 絹織紡績所(新町爲用の問屋及び見)
 地方御注文の葉
 流行衣裳

御禮式用御衣裳見積表(註)
 呉服物代價表
 衣服裁方積方の事
 錦上百花
 植物模様
 新譜
 始めて聲を奏ぶ記
 去年の春
 かいし 重單笥
 袖模様
 黒 紬
 附 録
 合名會社三井銀行案内
 以上

『水面鏡』 目次 3・4頁(ノンブルなし)

明治三十三年十月十五日三井呉服店本店總陳列場開場の第一日
午前九時三十分店前入口雜踏の景



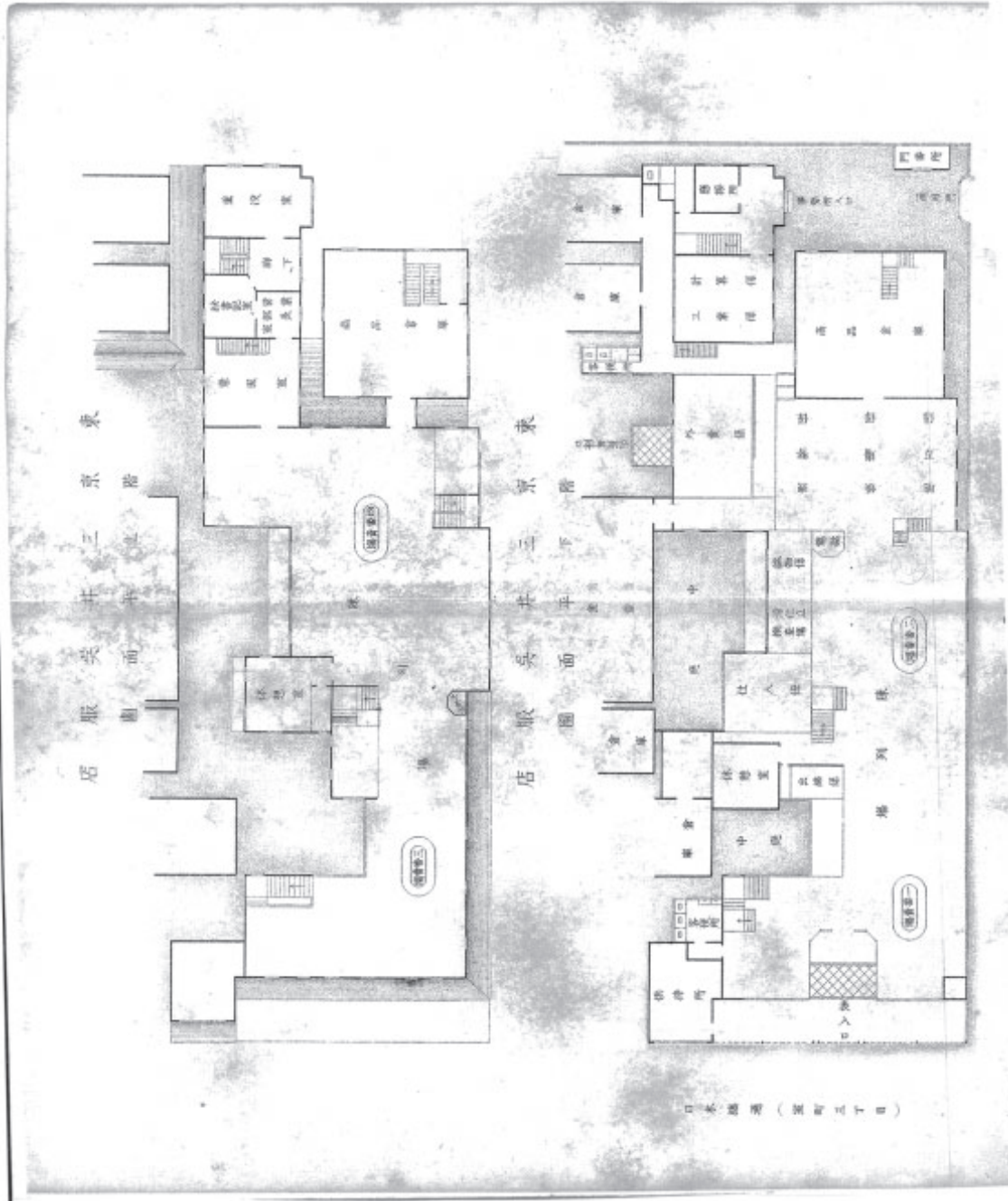
當日は午前六時の開場にして午前九時半に至るまで山を成して
入場せし來客數正に八千五百場内立錫の餘地を以て已むを
得ず一時門を閉ぢ入場を謝絶するに至る國中正面入口の戸を鎖
ちたるは之が爲なり

明治三十三年十月十五日三井呉服店本店總陳列場開場の第一日
午前九時三十分駿河町通來客出口の景



總陳列場を側面より見たる圖

『水面鏡』 口絵写真 1頁につき1葉、
モノクロ・横向きの状態で挿入（裏白、ノンブルなし）

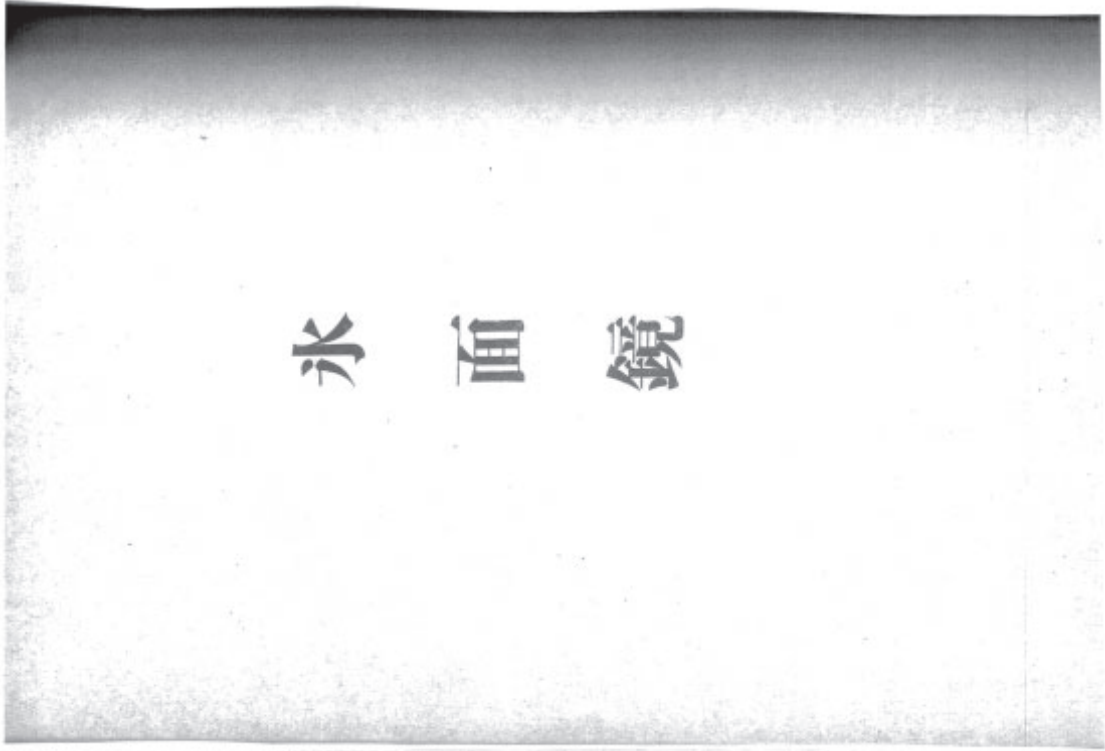




『水面鏡』 生地雛形 1頁につき1葉 (裏白、ノンブルなし)



『水面鏡』 生地雛形 1頁につき1葉（裏白、ノンブルなし）



氷面鏡

氷面鏡 (三井呉服店案内)

商標



三井呉服店の商標

三井呉服店は上に記す商標を用う故に何れに記すも此商標を目印とす

三井呉服店事業の説明

三井呉服店は元の越後屋にして二百年來打續きたる三井家祖先の業なるが其營業とする所は左の如し

- 一 呉服類販賣并に其受託販賣及び裁縫染織
- 一 製糸及び紡績

『氷面鏡』扉(文字朱)と本文1頁目

三井呉服店の本支店出張所及び工業所

三井呉服店の本支店出張所及び工業所は左の如し

東京本店 東京都日本橋區淺草
電話 五〇五、五二五番、本局 二二〇番

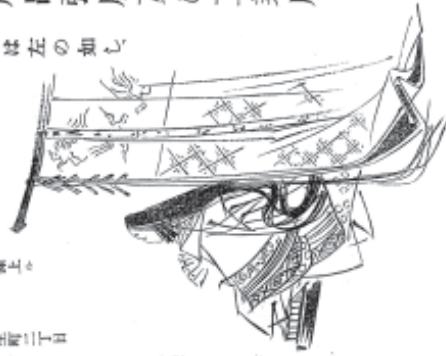
大阪支店 大阪市東區南船場二丁目
電話 四四〇番、本局 四四〇番
(以上二個所は呉服物販賣店をり)

京都支店 京都市上京區錦通二條上
電話 三〇〇番、本局 三〇〇番

桐生出張所 群馬縣上野郡桐生町二丁目
(以上二個所は呉服物仕入店をり)

横濱出張所 横濱市本町二丁目三番地
電話 三〇三番、本局 三〇三番

福井出張所 福井市本町四十七番地
(以上二個所は輸出物販賣取扱所をり)



衣はすてふ
天の香久山

京都支店附屬三井染工場 京都市上京區南區
(支障染其他機械染一切の工場をり)

富岡製糸所 群馬縣上野郡富岡町大字富岡

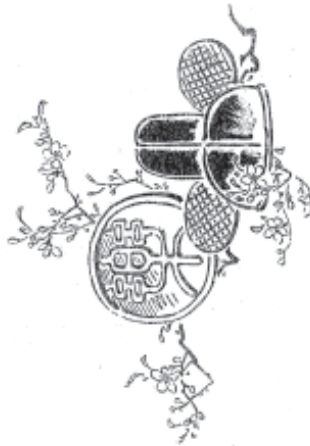
大崎製糸所 栃木縣上野郡大崎町大字大崎

名古屋製糸所 愛知縣尾張國津島郡津島町大字田圃

三重製糸所 三重縣津島郡三郷町大字東郷
(以上四個所は生糸製造所をり)

新町紡績所 群馬縣上野郡新町

前橋紡績所 群馬縣上野郡前橋市大字六供
(以上二個所は絹糸紡績所をり)



る知を信爾てり足金在

『水面鏡』 支店、出張所、工業所

地方御註文の葉
 当店は土地の遠近を問はず手廣く營業いたし
 候へば北は北海道の果より南は臺灣の隅々まで街
 渴者の數は限なく津蔭を以て日増に繁昌いたし難
 有仕合は奉存候然れば各様の御便利の爲には
 十分に力を盡し工夫を凝らす中にも地方の御
 各様に對しては土地隔り居り小丈に一層注意
 を加へ既に先頃より店内に地方係と申すを置
 き老練なる番頭を始め何れも此の道に精しき
 もの數十人を選みて掛あつたり専ら市外より
 の御註文のみを取扱ふことと爲し四季の更替ごと
 は宴會物語吉禮祝儀のなりとも郵便にて
 御座り候御取扱ひは此の係の者にて御好みの品又は御
 似合の御物を取扱ひ直に内取り申上り仕組に
 御座り候御自身親しく當店へ御出向の上御取扱
 め相成候と同然品物は正附なれば取扱に二様あることな
 る又荷物の送付は御註文書到着の即日小包便にて差
 立てり故に御用の時日を費さずして速に御用を辨
 することにお成り候御取扱ひには上なき御便利と
 左に御註文の御取扱ひと當店の御取扱ひの大畧と申す

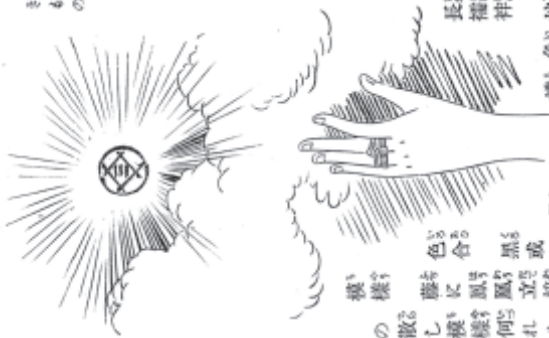
『水面鏡』 「地方御註文の葉」 1～2 頁目 (赤地に白抜き文字)

流行衣裳
婦人向

いノ部 十七八歳御令嬢の見立

横色合上御 紋五所三枚重
様合着定 地買所三枚重
雪栗皮及風 有或は縮織重
中の有は影の華し白上引隠

下着 刷柄の仕立地買は色合様上着と同代價九十圓前後



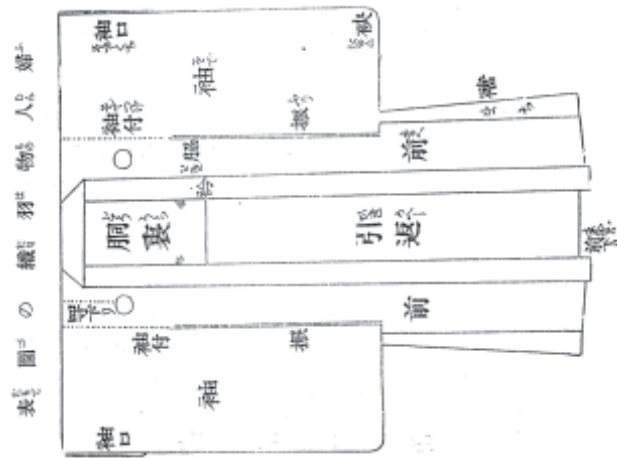
長襦袢 地買は色合様は肉色又は紅色
紋羽二重或は紋縮織
は肉色又は紅色
様透の梅菱田鹿の子
葛様霞に花草様
代價二十五圓前後

帯 地買七枚織
色合黒或は白茶
横様 藤に風立柳様大輪牡丹に湖紅葉梅
の散し様何れも金通と五十圓より百圓包

紐の元敵様代價三百圓
ろノ部
上着 地買御石風通
色合 牡丹色薄茶根御納戸
裾廻しは細の襷具代價二十六圓前後

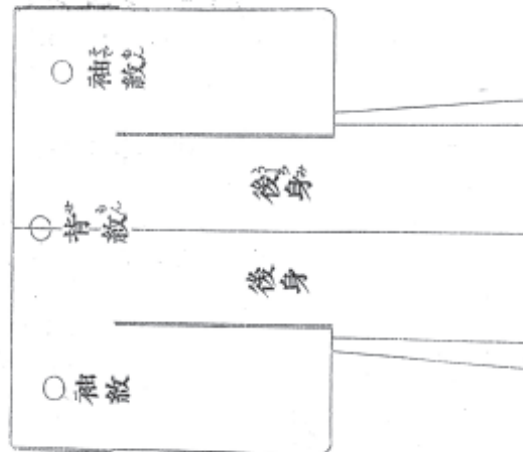
『水面鏡』 「流行衣裳」 冒頭の1～2頁目

衣服裁方積方の事



婦人羽織(小振物)

表 裏 上 下



黒 縮 織 婦 人 羽 織

『水面鏡』 「衣服裁方積方の事」 52 ~ 53 頁

羽織 裏は七色織大幅物
 代金 二十三圓五十錢位
 内評
 白縮緬小幅三丈物一反
 七色織大幅五尺五寸
 異縮緬染仕立上り
 寸法
 丈二尺五寸 袖一尺六寸
 前の返り紐付まで後の返り一尺三寸
 裁方



後	前	前	後	袖	裾
身丈一丈七尺四寸				六尺二寸	六尺四寸

婦人羽織 (中幅物)

銀鼠縮緬入羽織
 羽織は色織子
 代金 十五圓五十錢位
 内評
 白縮緬中幅二丈三尺五寸 色織子一丈八寸
 異縮緬染仕立上り
 寸法
 丈二尺五寸 袖一尺五寸
 前の返り紐付まで後返り一尺三寸
 裁方

の上がき重にだきまき



小 夜 衣

袖	口	袖	前	後	裾
五二	五	五七	五二	五二	五〇三
身丈二丈八尺一寸					六尺四寸

六五

ひ

も

鏡

四ツ身女子羽織小振物

友禪細織四身羽織
裏は檜皮色綾子

代金十四圓五十錢位

内器

友禪縮緬小振一丈九尺五寸

紅色綾子一丈

真綿染仕立上り

寸法

丈一尺八寸 袖六寸

前の返り紐付まで後の返り一尺

裁方



幅五寸九



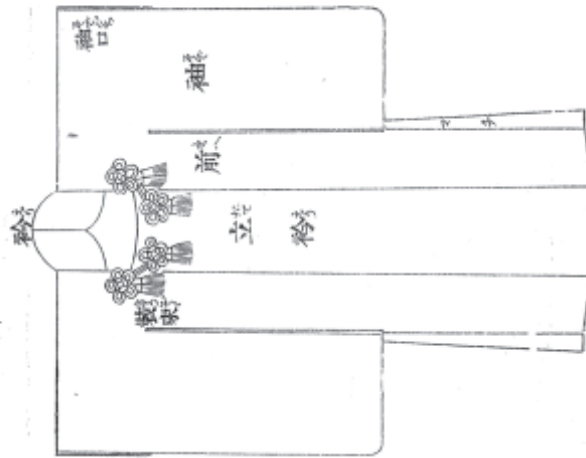
ひ

も

鏡

七五

表圖の服裁女子好



『水面鏡』 「衣服裁方積方の事」 56 ~ 57 頁

本裁婦人小袖(小幅)

黒紋羽二重引返し裏模機綿入小袖 上着 一枚
 御召真紋羽二重通し無拵 下着 一枚

代金四十圓
 内評

紋羽二重八丈物一疋 紅絹一反半
 真綿吹綿 染仕立上り
 機機飛鶴比根引拵機高六寸

寸法
 丈四尺二寸 袖一尺六寸 引返し一尺五寸 立襷二尺六寸
 裁方

幅分五寸九	後四尺二寸	前六尺四寸	背五尺	一尺	八掛	八掛	八掛	八掛	立襷二尺七寸
	御丈二丈六尺八寸		袷	袷	五分				立襷二尺七寸
			三尺七寸	三尺七寸	五分				

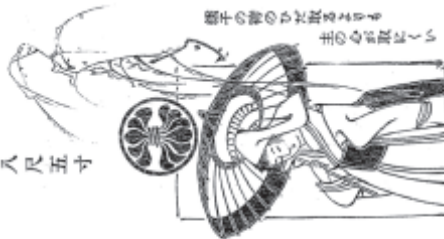
本裁婦人小袖(小幅物)

小紋細網引返し綿入 上着 一枚
 同上廻り無拵肘袷比根 下着 一枚

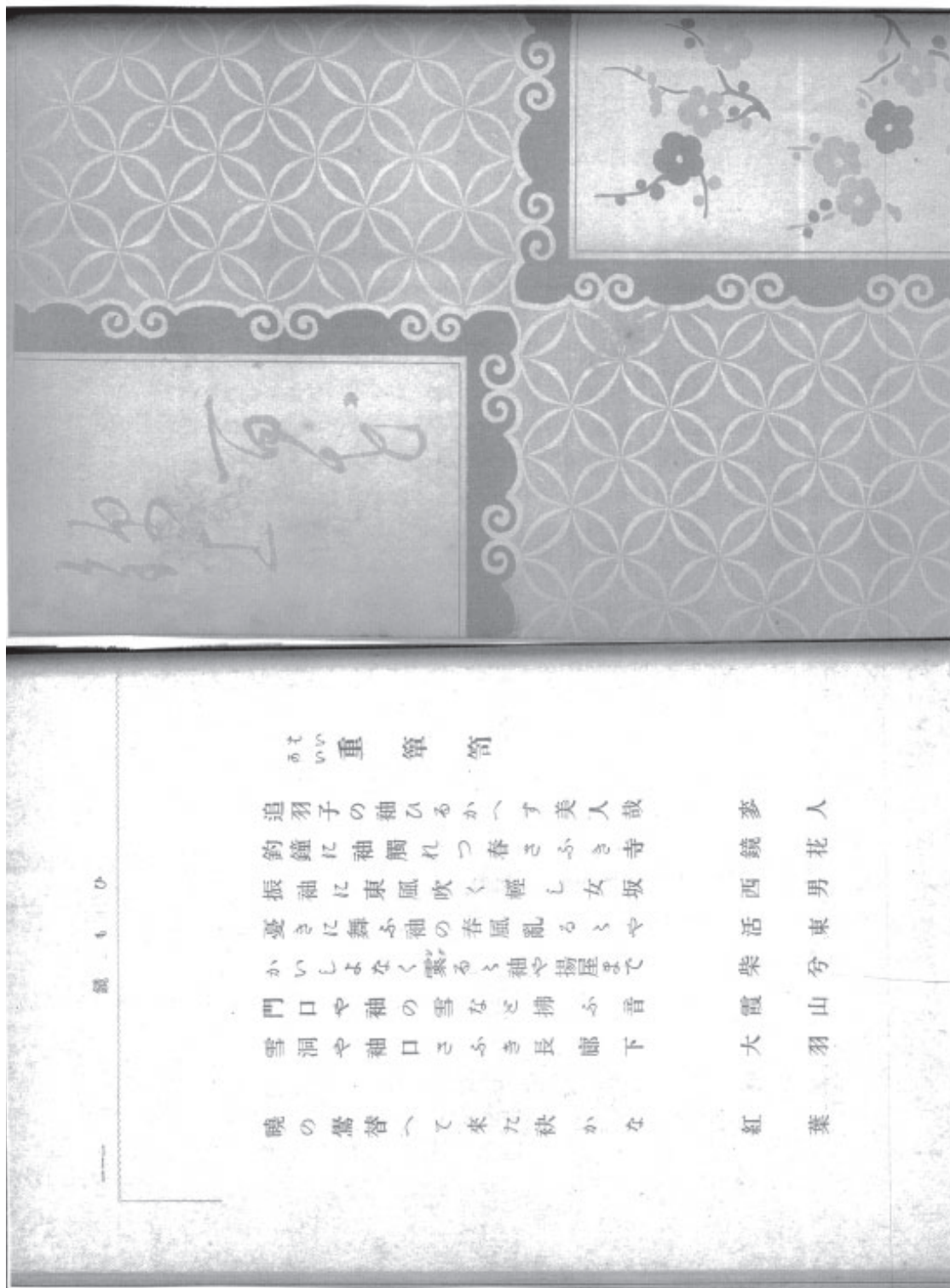
代金五十八圓五十位
 内評

白縮緬小幅九丈四尺五寸
 紅比根絹一反一丈 紅絹一疋八尺五寸
 真綿吹綿 染仕立上り

寸法
 丈四尺二寸 袖一尺六寸 引返し一尺五寸 立襷二尺七寸
 袖口振りかぶせ共四寸前
 裁方



朝子の御のちび取立より
 主の命を取どく



『水面鏡』 文芸欄「錦上百花」内扉（白地に朱の色刷り）、
「^{あて}重簞笥」1頁目（文字朱）

黒 軸

（紫 葉 明）

（一）

小 説 九一

乍早速一紙申入候、初其後は如何被_レ審候哉、當方一同無事に罷
 在候間、何卒御安心有_レ之度、然者此度は誠に涉_レとも何れも縁外
 の仕合にて、俄に一家再興の運を開き候と申すは、別儀にも無
 之、兼_レ時_レ有_レ候中備_レ鐵道事、今般急_レ設の運びに相成候が、
 右線路は國山、其_レ金、總_レ租、湛_レ井、美_レ袋を通り、當_レ地は落_レ台よ
 り川_レ向_レを行_レ管_レに開_レ及_レび居候處、落_レ台の鐵_レ橋架_レ設不_レ都合の由に
 て操_レ樣_レと相_レ成_レり、即_レち回_レ所より霜_レ山を陸_レ道に買_レき、松_レ山利、
 柳_レ坂の下に出_レ候やう改_レり候、就_レ而は柳_レ坂下の持_レ地悉_レ買_レ上_レと申
 事に相_レ成_レ候へば、承_レ知の通_レり廢_レ物同_レ然_レの地_レ所にて直_レ買_レも出_レ來_レ不_レ

三井銀行案内

三井銀行の起原

一 録 附 鏡 も ひ

三井銀行の起原は今を距ること二百二十餘年前に在りて三井家中興の祖先が伊
 勢國松阪より起りて京都及び江戸に店舗を開き從來營み來りたる家業の外に更
 に爲替兩替の業を始めたるに基けり京都の兩替店に於ては世々禁裏御所御掛屋
 御用を勤め江戸の兩替店は貞享四年以後幕府の爲替用達たり江戸の兩替店は日
 本橋區河町に在りて延寶六年より天和三年に至るの間に開業したるものに係り
 吳服店越屋の名と共に人々のよく知る所なりき就て元禄四年には大坂にも亦
 兩替店を開きたり
 明治維新の際には三井組の名を以て政府の金銀出納の事務に當り引續き御用爲替
 方を命ぜられ古來の慣習に依りて爲替座と兩替店の業とを營み來りしが明治九
 年七月に至り新に私立三井銀行を設立して此業を承継せたり是三井銀行といふ

『水面鏡』 小説「黒軸」1頁目、附録1頁目

明治三十三年十二月廿九日印刷
明治三十四年一月一日發行



編輯者

合名會社三井藥服店營業部長

日比翁助

東京市日本橋區鹽町七番地

印刷者

齋藤章達

東京市日本橋區兜町二番地

印刷所

東京印刷株式會社

東京市日本橋區兜町二番地



『水面鏡』 奥付と裏表紙（表紙と同様の色刷り）

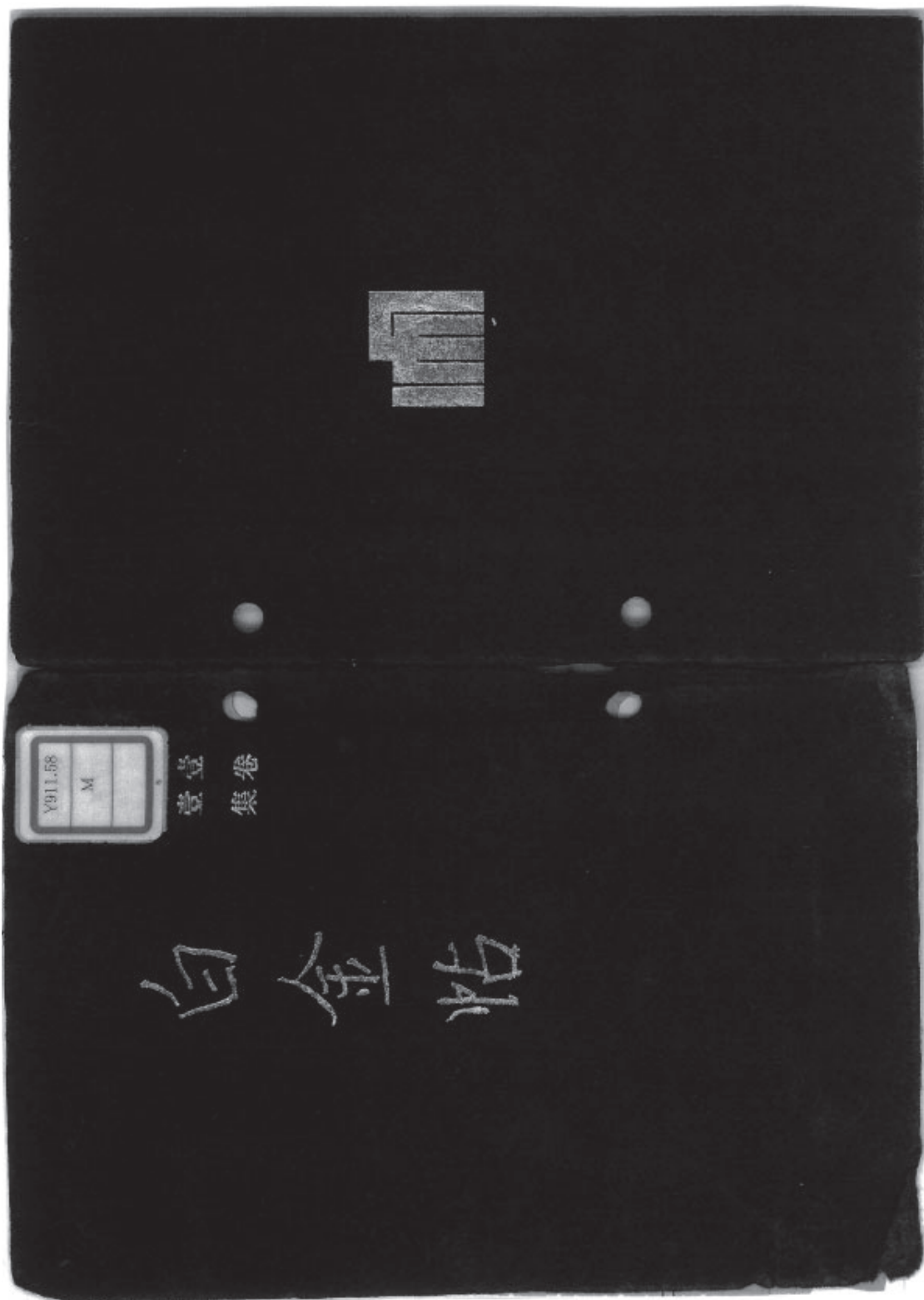
白金帖

a 白金帖、第1巻第1集〜第1巻第3集 三冊 請求記号 Y911.58/M 資料 I D 512004769

b 白金帖、第1巻第4輯 一冊 請求記号 Y905/S 資料 I D 512003512

第一集〜三集と第四輯とが分割所蔵、いずれも四六判（各集装幀・内容・折丁・頁数等の詳細は『目録』参照）。aは折本。右側に二箇所穴を穿ち、三冊纏めて黒紐綴じの形状で保存。外題「白金帖」（表紙右上部に「第壹巻／第壹集」「第壹巻／第貳號」「第壹巻／第參集」と各々表示）。表紙・裏表紙（香の図）共に紺土佐に銀の箔押し。書名の命名と表紙題字は白秋（第一集編集後記）。第一集大正四年一月（印刷は前年十二月）、第二集同年三月、第三集六月。奥付は印刷・発行年月の後に「編輯者 深川富岡門前町 宮川兼次郎／発行者 青山与志／印刷所 日本橋四日市 紀友扇店」の記載と、朱で香の図。第二集・三集は発行者の記載なく、印刷・発行年月の後に「発行所 白金詩社」と記載。編輯者・印刷所は変更なし。bは並製本。外題「LE PLATINE / NUMÉRO III. / ANNÉE I. 1915」仏語・横書き。表紙・裏表紙は黄色アートペーパー（影印参照）。扉「白金帖 第一巻 第四輯」（題名文字朱）。第四輯目次に「装幀及裏絵 富ヶ岡曼魚」と記載。大正四年九月刊（印刷は八月）、奥付の記載はaの第二集・三集と同様。日本近代文学館・大妻女子大学図書館・名古屋市図書館も所蔵するが、第一集〜四輯までの一括所蔵且つ編者宮川の歌集『南京玉』も併せて蔵する例は他になく、貴重。

巻頭は毎号白秋の詩（一・三集）・短歌（二集・四輯）。二集巻頭では、深川富岡八幡宮前の宮川の店の鰻が歌に詠まれている。編輯者宮川は毎号名を連ね、茂吉・勇・朔太郎・犀星らも短歌や詩を寄稿。名取春仙らによる挿絵が一葉ずつ掲載。第一集巻頭の「この帖はわれのなつかしくいと尊ときかずかずの宝石をおさめたる筈なり。／青山よし子」の序文及び一〜三集編集後記から青山の全額出資に拠ることが知られる。定期刊行でもなく、「常に新らしき驚異を求めて流転せんのみ」（四輯後記）といった自由の気に満ち、渋味ある瀟洒な装幀に脱俗・清新の風味が宿る。（峯村至津子）



『白金帖』 第1卷第1集 裏表紙と表紙（文字は銀の箔押し）

白金帖		第一集目次
蛇	篇	北原白秋
重	影 (フシムラサキスズメ)	桑原隆人
獲	沼	宮川兼次郎
紺屋の燕	園	西三條宜成
詠嘆のはしめに	得 (柳 豊)	西村陽吉
		名取春仙
		横地信輔
		栗田朱鳥

911-58 M

京都女子大志澤文庫
第 61791号
昭和32年8月1日

この帖はわれの水つがしきいと歌とき
いずかすの寶石をおさめたる歌あり
青山よし子

『白金帖』 第1巻目次、青山よし子の序（囲み罫朱）

眞 實

北 原 白 秋

眞實なると誰かいふ、
眞實ならずと誰かいふ。

概らかなれども、また深く
水は越をこそすべるなれ。

けふのよき日

女どもに惚れられたらば
うれしかろぞとおもへども、
ふられたらばくやしからむぞ、
よしもなやの、けふのよき日を。

『白金帖』 第1巻第1集 本文1～2頁（ノンブル及びその上の横線は朱）

お 手 玉

宮 川 兼 次 郎

かてだまのはながひらひた、

春に咲た、

はつと投げればはなが降る。

友仙のはなびらがちる

ほら、ほらと

おじやみ櫻のはなひらが。

7

金 の 沼

古沼は碧く黙せり千年の水に轟くと河骨咲くも

河骨はけろりとさきぬかわたれの風は黄色を敵に吹けり

ぬま深く淀める水に一とつ咲く河骨の花は奪かりけり

大沼のまなかに専ら金無垢の花竹めり河骨一本

8

『白金帖』 第1巻第1集 本文7～8頁（同前）



獲 得

名 取 春 仙

13

紺 屋 の 燕

横 地 信 輔

まろび来て夜半に吉兒は乳をさぐり父の乳なれば目撃て泣けり
 飛行機がとんで来しよと語り眺見等打たなく船屋の大鼓
 ひやうひよろ光りときをり釣橋の月に電車のすべりて行くも
 さつと入りさつといで来ぬ紺屋の燕藍のあぶくの赤き日に

14

『白金帖』 第1巻第1集 13～14頁（同前）、13頁は名取春仙 挿画

白金帖		第二集目次
春色辰巳雪		北原白秋
春寒集		齋藤茂吉
譯詩三篇		桑原隆人
赤いトマト		栗田朱鳥
傀●偏師		白●史郎
大●紅蓮		横●北信輔
水廓 <small>(挿畫)</small>		名取春仙
深川八幡		間島琴山
西方に淨土あり		長田秀雄
高形野天皇詣		宮川兼次郎
盲藝人		吉井勇

『白金帖』 第1卷第2集 目次 (黄色地に文字黒)

春色辰巳雪

北原白秋

雪火鍵歌仙櫻のうはさよりほのぼのと春も見へそめにけむ

ほのぼのと八幡鐘も鳴ることかこの辰巳の雪のあけぼの

雪の降八幡前の鯉屋のうなぎはすうといま割かれたり

春景色天水桶にふるみぞれ牡丹雪とぞなりにけるかな

紺蛇目雪まつしろき宮川の裏木戸あけてゆくゑ知らずも

梅唇春告鳥の心かも障子あくれば降る牡丹雪

春景色木場の木の香を忘れぬ洲崎かへりの雪のしののめ

芝居観て心をどりてたまらぬは忠臣蔵の雪のあけぼの

春 寒 集

齋 藤 茂 吉

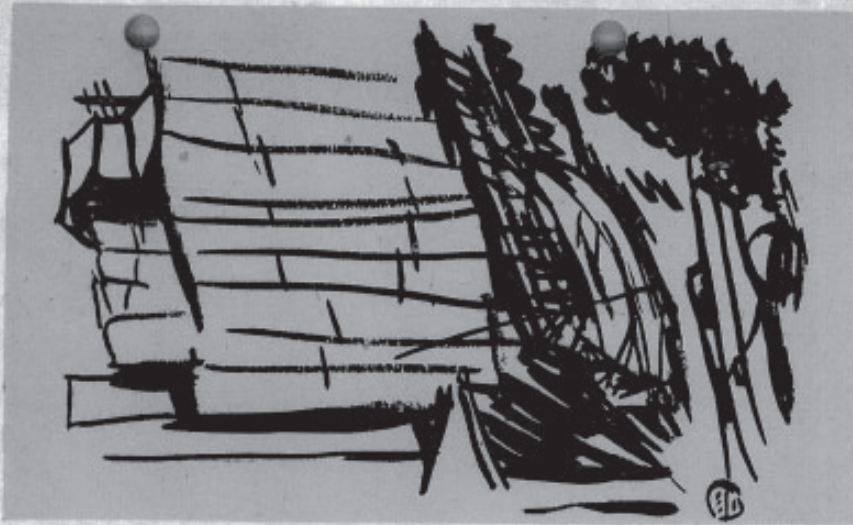
野のなかに掘りたる穴の赤土のへは春は来れども霜は結ぶに
日光のなかに眠れる豚ひとつ眼をひらく寂しとぞ云はむ
夕ぐれて農夫いそがしく追ひつめる豚の走りせしまらくも見む

冬木原入りてを来ればゆづり葉のひそかに立ちて日に照るあはれ
春されど未だは萌えぬかへるでの木立のなかにゆづり葉も見ゆ
はだかなる冬木のなかのゆづり葉の重き故葉に紅のかなしも
冬木原に見ゆるゆづり葉垂り舞群あはれなるかも音だにもせぬ

『白金帖』 第1巻第2集 本文3～4頁（同前）

枯れひからびし身となりぬ。
映し入る光、ときたまに
まぼろしすれば、たふとしや、
老尾のやうに一心に、
地に涙して伏拜む
後光まぼゆき御姿を、ひかしの君を。

14



15

水 廊

名 取 春 仙

『白金帖』 第1巻第2集 本文14～15頁（同前）、15頁は名取春仙 挿画

盲 藝 人

吉 井 勇

しみじみと悲しき顔をなせるゆまわれまた云はずあはれ小せんと
 馬樂忌も近しと云ひてうつむきし小せんの眼より涙落つるも
 うつむきでものも云はざり馬樂忌の手向の發句のことや思へる
 汝は悲しさはあれうらやましと云ふ言葉を小せんいかに思ふや

20

見えぬ目に何をもとむる何を見る小せんは悲し盲目なれば
 落語家は悲しかりけりましてわが小せんは盲目かなしかりけり
 寒降るゆちべとなればわが小せん腹食ひたしと云ひにけらずや
 盲目の小せんは悲し見えぬ目の見えぬを知らで雪を見むとす
 雨いつか雪とかはりぬしみじみと小せんはもの思へるかなや

21

白金帖		第三集目次
酒中花		北原白秋
玩具箱		萩原朔太郎
こたへ	ナアアイ	岡野かをる
空中樓閣		岩佐清十郎
二人	キアンスロー	栗田朱鳥
堅川		西村陽吉
畫の椿	(挿巻)	川西英
芽吹く樹		尾山篤二郎
大榮山謡抄		富岡宣永
入江小景		白井史郎
妙の浦		横地信輔
龜語抄		宮川兼次郎
初夏		長田秀雄
新船頭深話		吉井勇

『白金帖』 第1巻第3集 目次 (黄色地に文字黒)

京都女子大志澤文庫
第 61791号
昭和32年8月1日

三巻の終りに

白金帖も限いてここに三巻を上梓する事を得ました。併
 せ、いづれから書體習字を志す諸大家の御好意で、共
 の御書出展の全部を賞讃せらるる方の特典は著者同人
 の所望限りふかきこと御座います。又巻毎に編輯の上
 の注意や、意外の批評を請る方々にも共に随で御禮を申
 上げられまされん。終りにのぞみましてこの奥の香字
 の巻に御紹介及御習字なすくる多くの文藝雑誌其他に厚
 く謝禮を申あげます。

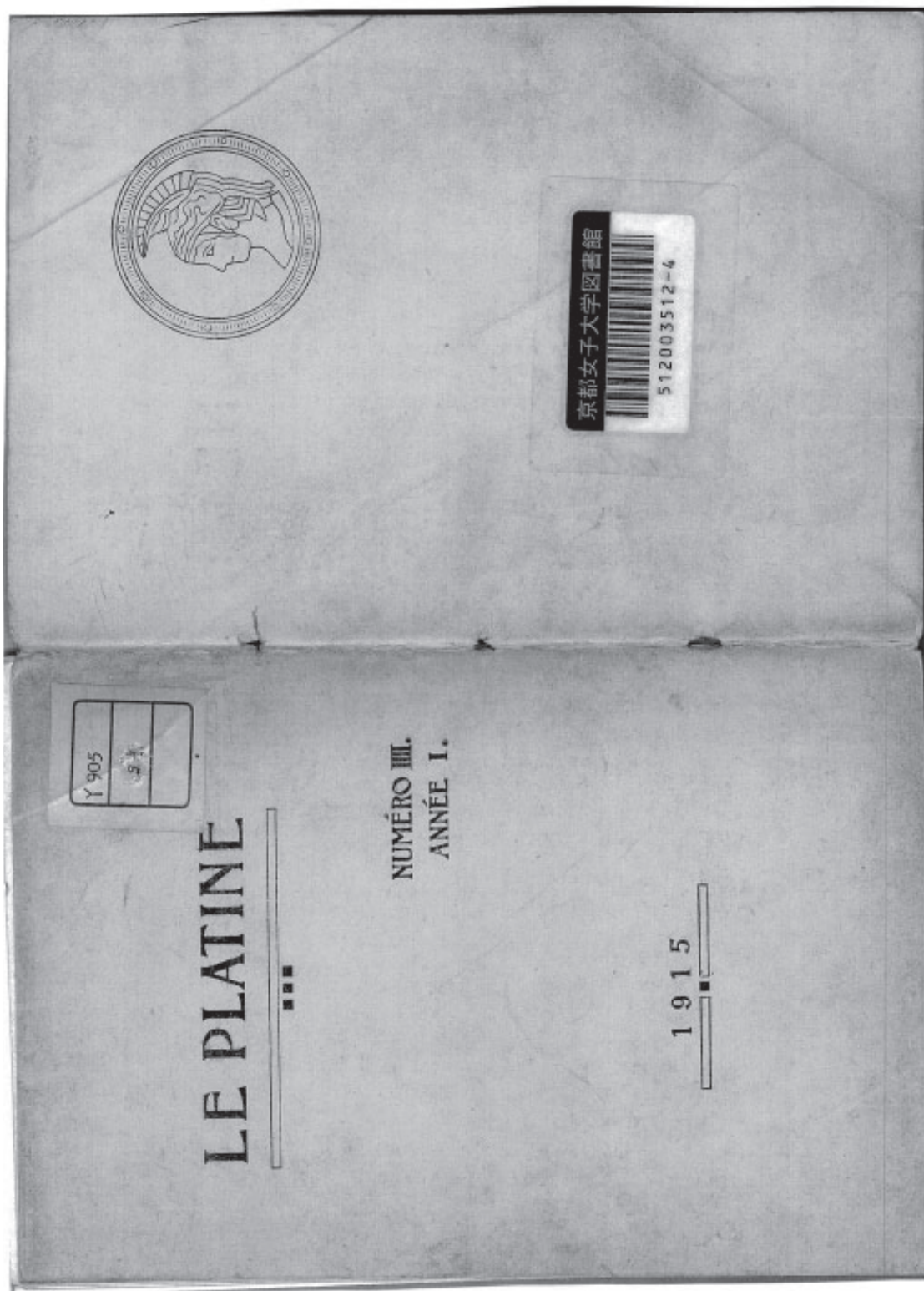
大正四年
六月上院

白金社同人

大正四年五月
白金社同人
編輯 行野行樹
発行所 白金社
印刷所 東京印刷局
発行所 東京印刷局
印刷所 東京印刷局



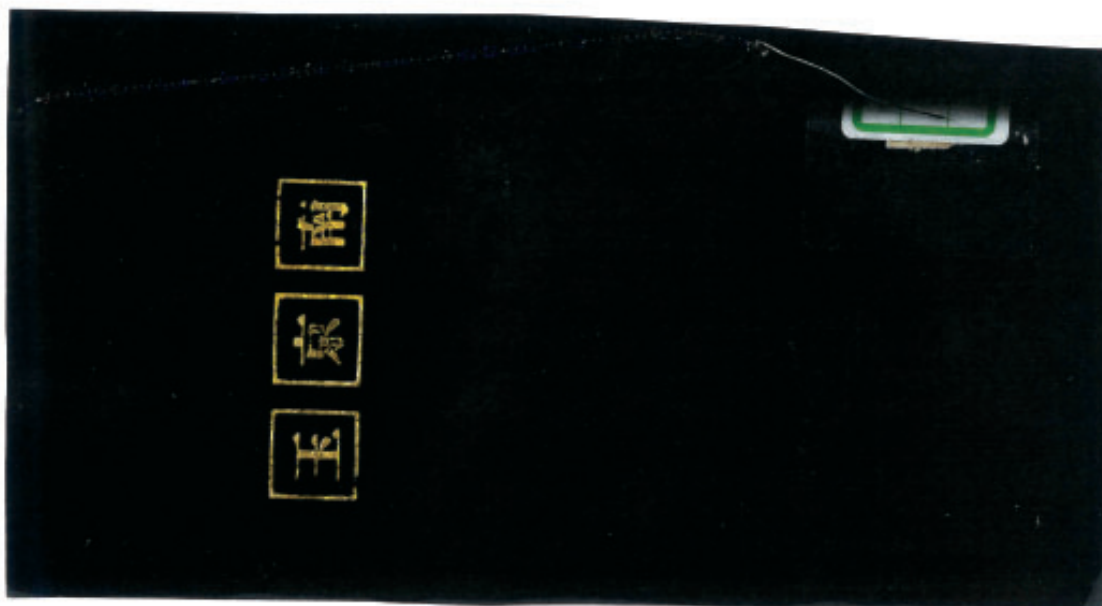
『白金帖』 第1巻第3集 巻末後記と奥付（囲み罫と香の図は朱）



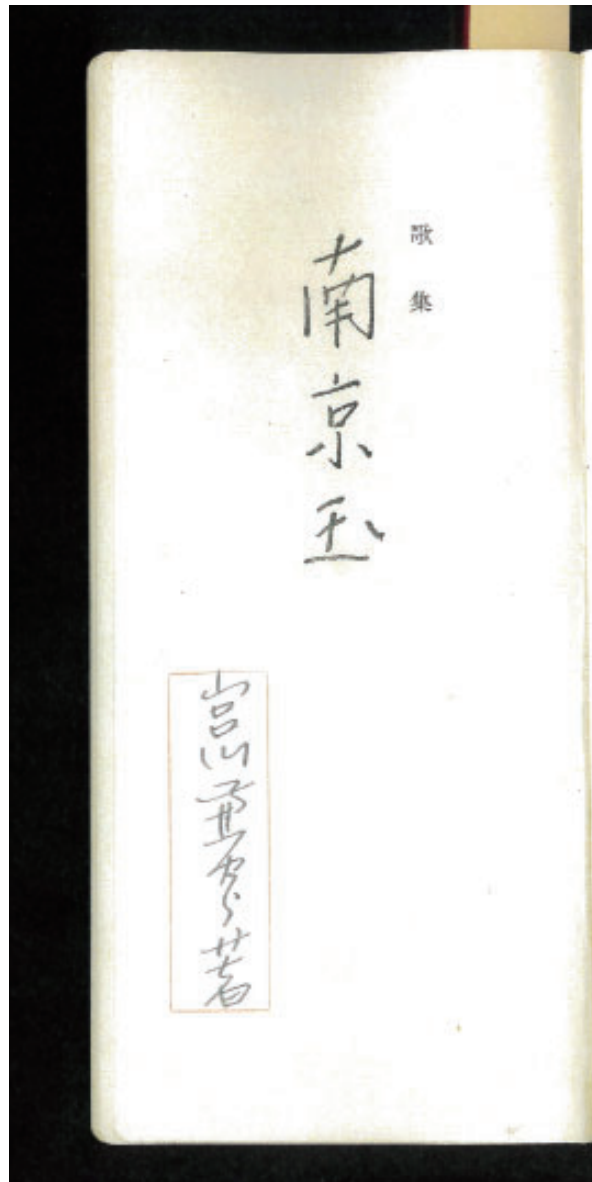
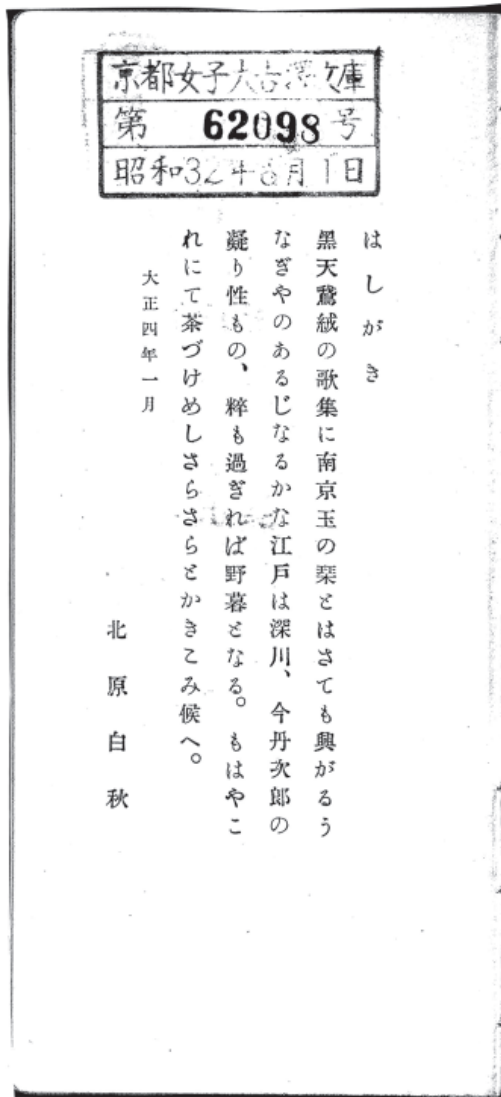
『白金帖』 第1卷第4輯 裏表紙と表紙（黄色地に文字黒）

洋装上製、縦一八・〇×横八・〇糎、縦長本。黒天鷲絨のクロスに三方金。糸にビーズ（南京玉）を通したスピ付き（装幀著者）と巻末に明記）。外題「南京玉」（表紙上部に右横書き、一文字ずつ囲み罫、全て金の箔押し）。背題・見返し題ナシ。扉（書名・著者名は作者自署と見られる）及び裏表紙は影印参照。前後遊紙各二丁、はしがき一頁、歌九二頁（二頁に一首ずつ記載、題を小字で表示）、挿画三葉三頁、跋二頁、関係者一覧・奥付各一頁、全てノンブルナシ。跋文後の一覧には、執筆者・画師と同等に木版彫刻担当高坂栄之助の名、印刷所三業社、製本所式部灌三郎を示す。裏面奥付には「大正四年三月吉日 著者 宮川兼次郎」他、前掲印刷所・版元紀友扇店とその所在地を載せる（以上、詳細は『目録』参照）。

私家版の歌集で大正前半期の北原白秋周辺の活動を窺う上での有益な資料だが、他大学図書館や国立国会図書館デジタルコレクション、国書データベースなどでも見られない稀覯本。前掲の雑誌『白金帖』共々架蔵している例は極めて稀。白秋の序文（「はしがき」と冒頭挿画、吉井勇の跋、名取春仙・廣川松五郎による挿画二葉を収める。著者宮川兼次郎（曼魚）は、本名渡辺。明治十九〜昭和三十二年（一八八六〜一九五七）。序文に「黒天鷲絨の歌集に南京玉の栞とはさても興がるうなぎやのあるじなるかな江戸は深川、今丹次郎の凝り性もの」と紹介される、深川富岡門前町の鰻屋「宮川」の主。同年、白秋や吉井勇、名取春仙らが参加する雑誌『白金帖』（白金詩社）を編輯、本書同様日本橋四日市の紀友扇店から刊行した。私家版ならではの凝りに凝った贅沢な装幀は、序文で白秋が「粹も過ぎれば野暮となる」と諧謔交じりに皮肉るほど。吉井の跋文冒頭に見える通り、江戸文化への傾倒、通人間の交流を背景とした遊びの気風の結晶とも言える一書。書名や装幀は、巻頭「からこ」の題の二・三首目と連関する。（峯村至津子）



『南京玉』 表紙、裏表紙とスピ

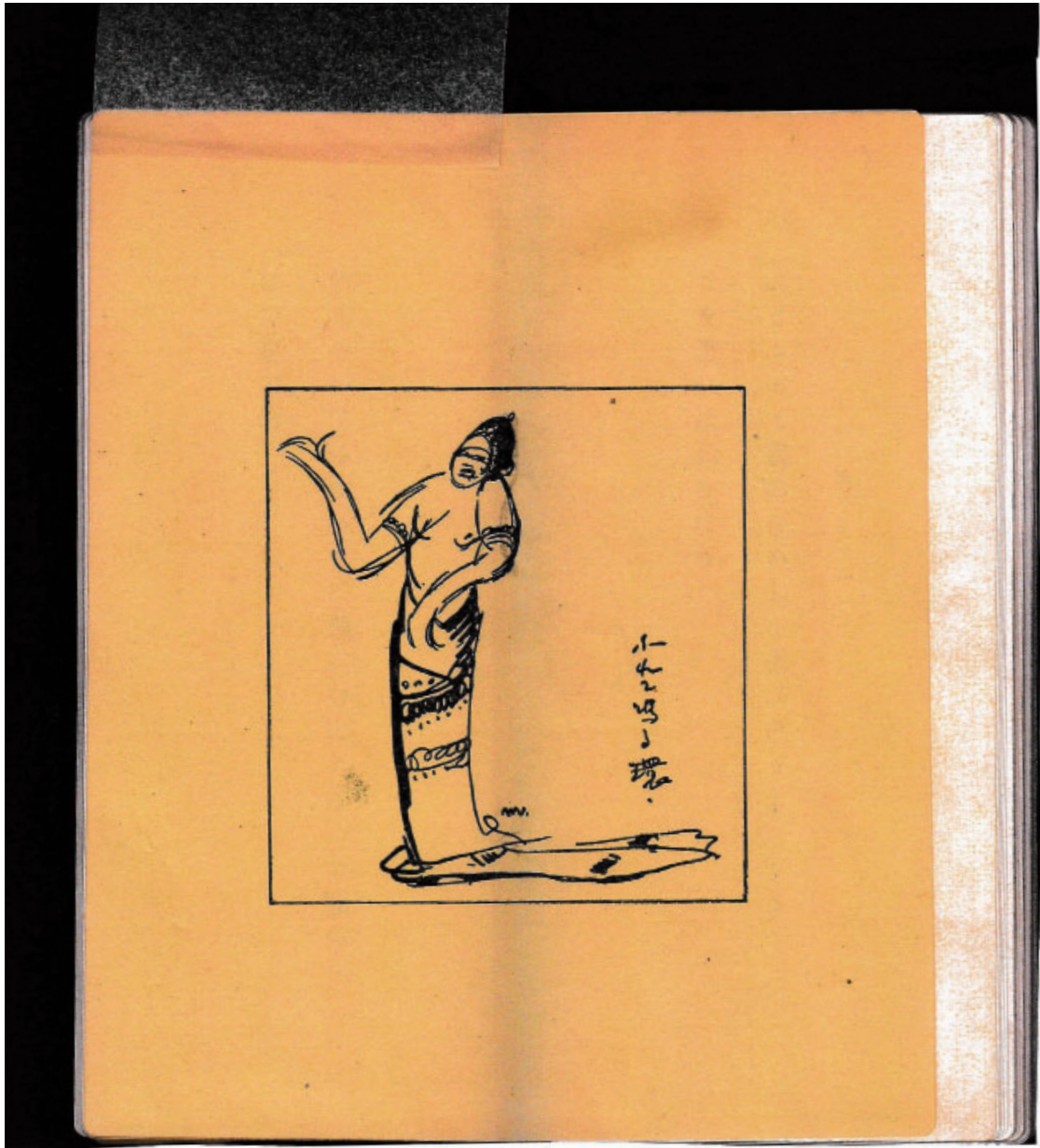


『南京玉』扉（著者名の囲み罫は朱）と北原白秋の「はしがき」

南京街足の小さきおふくろがゆつたりと唐兒
の手をひきて往く



『南京玉』 卷頭、白秋の絵と句、「からこ」第一首



『南京玉』 名取春仙 挿画「ふれて鳴る環」

抱かまほしく倚れば唐兒は泣てけり南京玉の
泪流るる

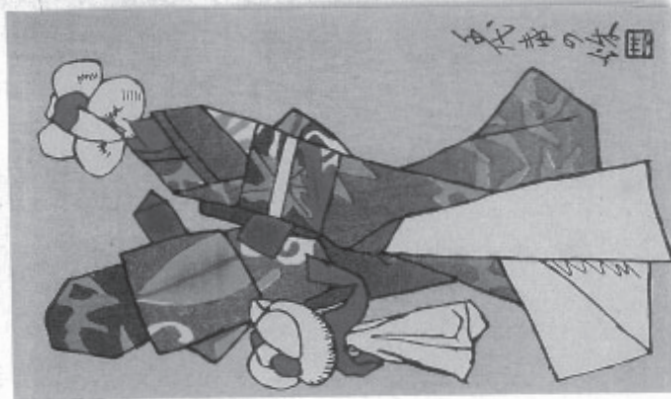
みやびやか唐兒の群れは天鷲絨のちやんちや
んこ着て長閑に遊ぶ

美しき名取春仙眞劔に理窟を云ひて穢き繪を
描く

『南京玉』 「からこ」 第二首・第三首、「爾の胸に王国を造れ」 第二首

じつこして金魚は冬を眠りけり十方法界みづ
も動かず

あねさまの頭はぬけけりのつべらほ幹元にし
む千代紙の秋



『南京玉』 「金の沼」第六首、
「強きものよ爾名は女なり」第十三首と廣川松五郎挿画（色刷り）

跋

花水橋に猪牙舟の、船頭の夢まどかなる、昔を今になすよしもがな。さればこの頃鶴が岡八幡前に、一人のおかしき男あり。藍皮町、榮郷橋より大磯小磯化粧阪まで、その名を知らぬと云ふひとなし。都の巽のゆかりにや、稻村ヶ崎新川の藏に、酒のづから醸さるる如く、作り出でたる歌と云ふは、

字餘り潮來のそれにもあらず。南京玉の三十一文字、いづれもとりどりに美しくければ、妓衆の膝にこぼすとも、ゆめ土になこぼしたまひそ。

宮川の若きあるじが夢に入るむかし辰巳の
たはれめもがな

鎌倉阪之下にて

吉井

勇

『南京玉』 吉井勇の跋文

